

## 『ヘンな日本美術史』のどこがヘンなのか

美術家・山口晃がカルチャーセンターで行った講演をまとめたのがこの本である。山口は新聞連載の小説「親鸞」（五木寛之著）の挿絵を描いていたから、一部の人にはお馴染みかもしれない。全体を5つの章に分け、年代順に日本の作品や作者を紹介している。山口も言うように作品を「古い順にならべただけ」（※1）であり、日本美術史というには、やや山口の好みに偏り過ぎた本になっている。しかしそのことはこの本の価値を下げない。なぜならこの本は日本美術史ではなく、美術家・山口晃の画論であり一作品だからだ。

読後の印象を一言で言えば、何より読みやすいということが挙げられる。芸術家を書いた本は、独りよがりや支離滅裂、評論ともポエムともつかない中途半端なエッセイのようなものが多く、しかも文体が硬い、というイメージがあった。それらは全く当てはまらない。優しげな独特の語り口での作品の分析は、山口の本音がそのまま表れていることが感じられ、説得力につながっている。

例えば、最初に登場する「鳥獣戯画」は、とりあげておきながら「実は好きじゃなかった」（※2）という調子である。雪舟の代表作「慧可断臂図」は「莫迦っぽい」「見れば見るほどやはりヘン」（※3）と評し、「松姫物語絵巻」に関しては「下手うまではなく下手くそ」（※4）。桃山時代の画家・岩佐又兵衛の描く人物像に対しては「アゴの下を取ってから来い」（※5）とまで言う。確かにあごが特徴的なのだが、それではあまりに身も蓋もない。

もちろんこれらの評価は理由あつてのものだ。このような軽妙な比喻やツッコミも交えて、絵とはどうあるべきか、日本の文化はどういうものか、現代の美術家はどうかあるべきか、西洋の美術と日本の美術の関係、美術教育の在り方など、幅広い内容が語られる。この本を読めば、山口の作品をより一層興味深く見ることができるとは間違いない。

では、そもそも著者・山口晃はどのような作品をつくる美術家だったのだろうか。この本の著者略歴によれば、「大和絵や浮世絵を思わせる伝統的手法を取り入れつつ、時空を自由に混在させ、人物や建築物などを緻密に描き込む作風で知られ」、（※6）「巧妙な仕掛けとユーモアにあふれた作品は日本のみならず世界からも人気を得て」（※7）いるという。霞とともに町が描かれた屏風や、屋根がなく家の中が丸見えになっているような絵巻物の手法を用いつつ、現代と過去の様々な人間や事物を、同一画面上で全くランダムに、時に融合させつつ配置し、一見何の違和感もない絵画作品を描き上げるのである。驚くほかない超絶技巧であり、その作品から感じられる古き良き日本への郷愁は人々を惹きつけてやまない。これが山口晃作品の一般的な見方だろうと思う。

しかし、美術評論家・榎木野衣によれば山口晃の美術家としての核心はそのようなところにはないという。

榎木によれば、山口が追究しているのは「『日本で絵画を描くことの正統性』」（※9）という理念であり、その「投影」（※10）、または「模型化」（※11）「装置化」（※12）が、山口の絵画作品なのだ。しかし絵画自体が西洋で発達した以上、描くことは「異端性」（※13）を持つ。西洋画の手法を用いて日本らしい絵画を描く山口の作品は、日本と西洋の「人為的な『縫合』」（※14）であり、そのため山口の作品では、例えば作品中の馬とバイクの縫合は不自然になされ、「批評的に意識

しながら再構成」(※15)される。山口の作品は「純粹に絵を見ることの愉しみ」(※16)や技術への驚きが魅力だと思ってしまうが、本当は西洋追随型の現代美術よりも考え抜かれた「日本をめぐって描くことの近代的な自己批判の産物」(※17)なのである。

つまり、山口の絵画作品は、その見た目の魅力とともに、日本の美術史が持つ不自然さを批評するような装置ともなっており、それもまた魅力だ、ということだろう。

以上のことを踏まえてこの本をもう一度見てみると、一美術家である山口の画論が、何故これほどおもしろいのか分かる気がする。山口の絵画作品が、見た目の魅力とすぐれた日本美術史に対する批評性とを兼ね備えているのと同じように、この本では分かりやすく軽妙な名調子で昔の作品を分析しつつ現代の芸術や日本美術史の在り方について、さりげなく批評している。その意味でこの本は山口の一作品なのだ。

「ヘンな日本美術史」のどこがヘンなのか、と問われれば、それはこの本がヘンなのではなく、日本美術史自体がヘンなのだ。ヘンな日本美術のあり方を作品によって追究する山口の、ヘンな日本美術史への批評がこの一冊なのである。この本を読めば、山口独自の新しい日本美術史像が見えるだろう。

(1850字)

- (※1) 「ヘンな日本美術史」 p 4
- (※2) 「ヘンな日本美術史」 p 12
- (※3) 「ヘンな日本美術史」 p 101
- (※4) 「ヘンな日本美術史」 p 160
- (※5) 「ヘンな日本美術史」 p 174
- (※6、7) 「ヘンな日本美術史」奥付ページの著者略歴より
- (※8) 「山口晃大画面作品集」・(株式会社青幻社発行・2013年第3刷) p 202
- (※10～12) 「山口晃大画面作品集」(株式会社青幻社発行・2013年第3刷) p 203
- (※9、13、14) 「山口晃大画面作品集」(株式会社青幻社発行・2013年第3刷) p 204
- (※15～17) 「山口晃大画面作品集」(株式会社青幻社発行・2013年第3刷) p 205